

国際ガイア会議 (GAIA IN OXFORD II 1996) 出席私見

第3回の国際ガイア会議 (GAIA IN OXFORD II 1996) が、1996年3月30日から4月3日まで、イギリス、オックスフォード大学の St Anne's College と Green College で開催された。会議は、前回同様、ガイア論について徹底的に検討せよという1988年の米国地球物理学連合の Chapman 委員会勧告の線に沿って、第1回国際ガイア会議である San Diego 会議の形式で行われた。すなわち、哲学から、生物学、物理学、現代思想、人類学、生態学等々、あらゆる分野から出席を要請された60名ほどのメンバーで5日間にわたって、合宿討議するというものである。

今回のテーマは、「Evolution of the Superorganism」である。朝8時の朝食から、昼の discussion はもとより、夕食、時にはその後夜の9時頃まで行動を共にして、レクチャーあり、誰かをつかまえての informal な議論あり、VTR による検討会ありの多彩な会議である。今回、日本からは（というより東洋からは）小生1人の招待であり、朝から晩まで、ほとんど休む間もない議論のラッシュにはいささか疲労したが、心から通じ合う人たちの中にいるという安心感からか、心地よい疲労だった。

スマイレの美しい St Anne's College の中庭を眺めながら、幾つかのレクチャーや、多くの人と対話・討論はとても有意義だったと思う。特に、多分野の研究者が、一つのテーマでとてもユニークな発想から、「地球とは何か」を語る会議を、この様に隔年で開催できるとは実のところ、予想もできなかった。前回は「天気」(Vol. 41, No. 9, 1994) にも報告したように、1994年4月に開催された（なお、GAIA 論とは何かは、同号を見られたい）。その後、GAIA Charity や国際的大企業のスポンサーや、Green College 学長の Sir Crispin Tickell 氏らの多大な協力と資金援助もあって、開催できたとのことである。

Superorganism とは直訳すれば、「超生命体」ということである。というと、オカルトに感じる向きもあるだろうが、もしそのような考えを持つとすると、地球を

ある固着的な視点からしか見ていないことになる。例えば、こう考えたらどうだろうか？我々の身体そのものは60兆個の細胞の結合共生を成す1個の「超生命体」である。その細胞とは、原核生物の共生という「超生命体」である。また、ヒト社会とは、その超生命体の分散共生という、やはりひとつの「超生命体」である。そのヒト社会とて単独であり得ず、他の生命たちと異種分散共生を作っている。いま、それがこの地上空間を、席卷しているのである。その全体、地球生命圏は、同様に、様々な生命の織りなす異種分散共生をなす、やはり1個の「超生命体」と考えられないか(それをまた、GAIA と呼んでいる)。それが我々の現実なのであり、我々を取り巻く「環境」の実態であり、そうした総体を地球と呼ぶのである。

近代科学創設者の1人である James Hutton は、1788年、エジンバラの Royal Society での講演の中で、既に、次のように述べている。

“I consider the Earth to be a Superorganism whose proper study is physiology”.

ところがその後、物質科学的パラダイムの中で、みんなこの視点を失って今日に至っている。例えば昨今、「地球システム」などという言い回しが方々で見られ、地球科学者の多くが群がっているが、その実体は明らかに Hutton のこの視点の欠如の上に成り立っている。

この様な超生命体は何処から由来するのか？そのような超生命体を形成していく生命とは何か？また、そのような「場所」としての地球とは、本当は一体何か？その歴史とは何か？

この様な問いとそれへの議論が、生物、哲学、地球科学、物理学、現代思想、生態学、人類学等々、他面から発せられ、尽きない議論となつて、まだ早春の観あるオックスフォードで興奮の5日間として花開いたのである。

残念ながら、小生は我が国でかかる根源的な問いを、こんなに熱心に発し、それに真摯に議論し、新しい生命観、地球観を構築しようというダイナミックな会議

に出会ったことがないし、組織されたことを聞いたこともない。例えば、多分野交流といいながら、出席する前から、分かり切った手法、所詮、既存の同じレールに乗った、結局は同じディシプリンでしかないとか言い様のないだけの会が多いが…… (失礼!)。実のところ、その懐の深さに、一種の羨望を感じたものだった (思うに、GAIA 論の提唱者で今回の会の主宰者でもある、先鋭的な James Lovelock 氏の実力なのだと思う)。

すべて、既存の基盤をもう一度疑い、そこから、原点から見直してみよう。「地球とは何か?」、すなわち、その地球を創る「生命とは何か?」。

ここで会の雰囲気を知って貰うために、恥ずかしながら、筆者のささやかなエピソードを一つ。

筆者らのやっている閉鎖生態系実験で示された、生命による厳しい擾乱に対する regulation のデータを、雑談の中で、あの細胞内共生研究で名を馳せた Lynn Margulis 女史に見せた。ところが、Lynn は、とてもそのデータにエキサイトしたらしく、総会の席上でわざわざ発言を求め、その実験データの意味することの重大さをみんなの前で披露しだした。それにはいささか筆者もびっくりした。Lynn の大宣伝のお陰で、寄稿や論文依頼が舞い込む。東洋の片隅でのささやかな寄与としての、Lynn の励ましだと思ふ。

…といった雰囲気である。

そのほか、タンザニア出身のイギリス人類学者、Jonasan Kingdon 氏との出会いも忘れられないところである。ロビーで筆者をつかまえた彼は、ヒトはその道具・人工物によって、その心も、社会も、そして肉体をも変容させていくという、Self-Made Man、即ち、「自らの生産物の生産物」としてのヒトのあらましを語った。日本でも訳されている自著を筆者にくれた彼は、読んでみてくれと言う。その夜、我々の宿舎にあてがわれてあったオックスフォードの学生寮でそれを讀んだ筆者はとてもびっくりした。心底オックスフォードへ出向いた甲斐があったと思った。人の巡り合わせとは面白いものである。筆者らがいま展開しているオートポイエーシス論と同じ様なことを、彼もヒトの形成に考えていたのだ。彼は「人間とは何か」か

ら出発し、筆者らは「この地球とは、本当は一体何か」から説こうとしているという出発点の違いはあったが。その翌日から我々は、意気投合した。

話題提供はすべて先に述べた観点からの Superorganism 論である。即ち、Superorganism としての都市とは何か? 生態系のなす景観とは何か? 微生物たちは何をやっているのか? ヒトとは何か? 生命とは何か? その生命によって創られていく環境とは? そして地球とは?

内容の詳細は何れ、何らかの本になることと思うが、重要な一般的印象をひとつ。

概して、向こうの連中のやっている生命システム論に疑問が残った。ほとんどまだ、いわゆる第2世代システム論と呼ばれる、「自己組織化論」の範疇での話に止まっている。生命システム論では、オートポイエーシス論を視野においた日本での議論の方が、ずっと先を行っているという印象だった。実は、サンタフェ研究所の Dr. Daniel McShea と、筆者は、What is life? で激論に至ったのだが、彼との議論も、この点に還元されるだろう。Lynn もそうだったが、その重大さを認めつつも What is life? に対するオートポイエーシス論が、日本やドイツでほどには、まだきちんと整理、理解されていない印象を持った。この点について、ことが生命論や生成論の本質に関わる重大なことなので、Lovelock 氏には後で手紙をする旨伝えてある (なお、この点に関しては1ページや2ページで言い尽される話ではないので、近々他の論文や著者で議論したいと考えている)。

なお、新しい地球像の構築に向けて、持続的に議論していくよう、また、この学問の進展を図るために「The Geophysiological Society」の設立が本格的に動き出した。会長は、今回の会を取り仕切っていた先の Tickell 卿である。ただ、既存の専門分化してしまった「学会」の弊の轍を踏まぬよう、この会のきちんとした理念の理解の共有が必要であり、当面、いままでの会合に関与したメンバーで動いていくことになる。この点も新しい動きである。

(日本大学 森山 茂)